若い教師に贈る　～人生を彩る言葉～

はじめに

　私は、昨年３月に 38 年間勤めた教師を定年退職した。
　今思えばあっという間に過ぎてきた年月にも、振り返れば数え切れなりほどの出来事があった。教師になる時、自分自身の将来を思い描けてなかった私は、「3 年やってみて合わなかったら辞めよう」と密かに思っていた。

　約束の３年目。
　２年目で受け持ったクラスを持ちあがり、卒業させることが出来たが、自分自身では「思いが伝わらなかった」というネガティブな感情が湧き出てきた。卒業式の午後、人気のいなくなった事務室で学年主任の先生と何気なく会話をしていたとき、「3 年やってみて合わなかったら辞めよう」の自分自身への密約が頭をもたげた。私は、少し勇気を出して声にしてみた。「先生、私は教師にむいてないんじゃないかなぁって思うんです。辞めたほうがいいかなぁって。」

　暫く沈黙があった。
　先生は、表情をこわばらせて、大きく見開いた目でギロリと睨みながら、低く唸るような声でこう語った。「生意気なこと言ってんじゃないよ。たかが３年。何がわかる。私なんてこの年になってもわからないこと、出来ないことがあるのに。ふざけたこと言うんじゃない。」

　この言葉に救われた。
　サッカーを続けたくて、社会科を教える楽しみを感じて、子どもたちとのふれあいを通して自分を成長させられると感じて、体当たりで教師をやってきた私が、もっと力をつけて本物の教師になりたいと思った瞬間だった。この瞬間の感情は、それまでの私の人生の中で経験があった。高校の進路について父親に相談したときに思いっきり却下された時だ。

　私は、教師という仕事を「生業」にして、本当に良かった。

　人生は、言葉の力で支えられている。
　今、教師を目指す若者が少なくなっている。どこの現場も人手不足で大変で、猫の手も借りたいくらいなのに、その人がいない。教師という仕事に魅力がなくなったのだろうか。それとも「ブラック」というイメージで敬遠する傾向が強くなってきたのだろうか。

　教師は素晴らしい仕事であり、一生をかけて取り組む浪漫に溢れた仕事でもある。
　そんな想いを伝える術として、今こうして筆をとっている。若者たちに贈りたい。教師として生きたからこそ出会えた「人生を彩る言葉」を。

第一章　最後の式辞

感謝に繋がった３つの涙

　校長の式辞。これは、私にとって特別な意味をもっていた。
　自分の言葉で語ることを大事にしてきた私にとっての晴れ舞台だからだ。
　校長５年目は、その最後となる。これまで４回の式辞にもそれぞれ思い入れがある。共通するのは、自分の感じたことを等身大のまま伝えること。毎年のことのように、秋の充実した日々を迎えるころになると、卒業式の式辞で伝えたいと思う言葉が出現してくる。そこからの月日を、その言葉たちとつきあいながら、その日を迎えてきた。
　最後の最後。こだわりは、「やり切る」ことだった。

　自分の言葉で。何も見ないで。聴いている皆さんに伝わるように。

　過去４回の式辞も、全体の構成を頭に入れて、ほぼ手元を見ないで、語りかけるように伝えてきたが、「式辞」は常に手元にあった。いざというとき、文章に戻れるように。しかし、今回は、「式辞を手元に出さない」にこだわった。退路を断つというと少し大げさに聞こえるが、「自分が本当に思うことを、自分の言葉で語る」を表現するには、「式辞を出さない、読まない」ことが最も伝わりやすいと思ったからだ。
　その日が来るまで、これまでよりも早く、１週間前には「試し読み」をして、スマホに録音してみた。直前の３日間は、通勤の行き帰りに運転しながら聴いていた。準備を進め、気持ちも高まっていたので、何とかなるだろう・・・と楽観的になっていた。

　前日の夜、「本当に読まずに（何も見ないで）やるの？ 無理しないほうがいいよ。そんなのできっこないよ。」と妻に言われた。最後の一言が刺さった。「できるわけないって、だから挑戦してるんだよ。意味があるんだよ。」軽く反論した。
　「じゃ、今やってみて。できないって。」

　妻は、口数が多いほうではない。私に意見することもほとんどなく、いつも応援する側でサポートしてくれている。この日は、珍しく「明日頑張って」ではなかった。
　「大丈夫？」でもなかった。
　私自身がこだわりをもってやろうとしていることを承知の上で、「できっこないから止めたほうがいい」という、かなり辛辣なダメ出しだった。

　結果的にこの一言に救われた。
　妻には、この一言だけでなく、様々な場面で、それこそ「一言」に救われてきている。これらの言葉たちも「人生を彩る言葉」なのかもしれないが、ここでは割愛させていただく。

妻の一言に多少の反発を感じつつ、実際にやってみることにした。
わずか３０秒。いや、正確に言えば１０秒ももたなかった。
何度も何度も練習し、録音を聞き続け、全体の構成も頭に入っていたはずなのに、全く言葉が出てこなかった。自分でも愕然とした。自分の中の過信だった。「だいたい頭の中に入っているから、考えながら話せば出てくる」という自信は、何の役にも立たなかった。
「このままでは、読まずに言うのは無理だ・・・」
年をとり、記憶力が低下しているのかもしれない。頭が上手に動いてくれていなかった。思いだけが先走り、まるで「幼稚園の保護者リレーで、カーブで足がまわらずに転んでしまう年配のお父さん」のような感覚とでもいうか、そんな感じだった。
「そんなのできっこないよ。」の一言が、私を救ってくれた。
式辞は胸ポケットにしまっておくことにした。
「いざとなったら、読む」と少し気持ちを楽にさせて、そこから２時間、徹底的に練習した。ゆっくりと風呂に入り、式辞を言ってみた。あとはもう、当日の「火事場の馬鹿力」に頼ろうと覚悟を決めた。

最後の式辞。語りながら、涙が込み上げてきた。人前で涙を流す。教師として、何度も経験してきた。その都度、その涙は輝きを増した。「人前で泣くなんて・・・」と思われた方もいただろうが、圧倒的に「涙、いいね」が勝っていた。式辞でも伝えたが、涙こそ、言葉以上の言葉なのだ。

令和４年度　卒業証書授与式　学校長式辞

はじめに保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。ＰＴＡ活動等を通して学校の応援団となっていただきました。これまでのご支援に深く感謝・御礼申し上げます。
ご来賓の皆様、その場でご起立ください。今回は学校運営協議会の皆様にご参加いただきました。はまっこサポートとして、様々な形で応援していただきました。今朝も挨拶運動ありがとうございました。（ご着席ください）
そして、本校教職員の皆様。チームＳ学園として、９年生が力を発揮できるように、より良く導いてくれました。深く感謝申し上げます。
さて、令和４年度９年生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは、小さい子たちと仲良く遊んで慕われる、立派なリーダーでした。特に９年生での伸びは、素晴らしかった。本当にありがとう。これはＳ学園卒業証書　第１号。卒業式は、旧中学校校舎の４階体育館で行いました。皆さんは、旧校舎で生活したことのある最後の学年です。「Ｓ学園のプライド」を胸に、それまでの卒業生の思いをつなぐ、そんな学年なのです。
皆さんの門出に、私自身の経験「感謝につながった３つの涙」の話をします。
部活が終わったら勉強する・・・と宣言していた私は、まったく勉強が手につかず成績は下降線でした。１２月の三者面談のとき、「サッカーで頑張りたいからＹ高校の体育科を受ける・・・」と決めました。既に暗くなった帰り道、母親に「お父さんには、自分で説明し

なさいね」と言われました。これ、完全に順序が逆でした。帰宅して父に、「高校なんだけど、Ｙ高校の体育科に行きたいんだ。」
　父は一言。「ダメだ。」
　悔しくて、でも父には反発できない私は、母のせいにして母を侮辱しました。
　すると、父は「お前、母さんを侮辱するんじゃない。」と怒り、15 歳の私はぶっとばされました。私は、悔しくて恥ずかしくて、２階の自室にこもり大泣きしました。**それが１つ目の涙。**姉がそっと励ましの手紙を置いてくれました。涙でにじんだ手紙は、その後の私の生きる力になりました。

　２つめは、高校に入学してしばらくして、私がふられたときの話。
　勇気をもって告白し、その時は、「うん・・・」と言ってくれたので舞い上がってました。
　しかし、翌日下駄箱に手紙があり、「ごめんなさい・・・」をされました。こんな漫画みたいな話あるんですね。ふられた原因の一つが「坊主頭だから・・・」でした。
　それを聞いた同じサッカー部の仲間３人が突如頭を丸めてきました。「ふざけんじゃねーよ、なぁ」って。その時、友達の優しい心遣いに涙。**これが２つ目の涙です。**
　その彼らとは、今でも親友です。当時の話がでると「生涯チームメートだから」と言ってくれます。本当に困ったとき、その人のそばにいて力になる人、それが友達です。

　３つめは、１８年前、父が他界したときの話。
　ガンの闘病生活の最後の日、もう命が尽きる・・・という直前に私は、叫びました。「お父さん、今までありがとう。」って。「そんなこと言ったらだめ、お父さん死んじゃう・・・。」とその場にいた姉が言いました。「何言ってんだ。今伝えなかったらいつ伝えるんだよ。」と反論すると、姉と母も「お父さん、ありがとう。」と泣きながら言いました。
　その時、父の右目から一筋の涙が流れました。既に話す力をなくしていた父の涙。私には、「ありがとう」という言葉に見えました。**これが、３つ目の涙。私の人生で一番輝いてる涙**です。父は亡くなり、時間が経っても悲しみは消えませんが、今では「父は私の中にいるんだ」と思うようになりました。今、こうして語る言葉の中に私の父の思いがのっかっています。
　皆さん、これからは、この選択で良かったという道をあなた自身が作っていくのです。
　その結果を人のせいにしてはいけません。涙を感謝に変えて、乗り越えてください。それが生きるってことです。自信を持って自分の花を咲かせてください。
　皆さんが**満開の桜のように咲き誇る**ことを願っています。

令和５年３月１０日　Ｓ学園　　校長　松井　聰

※　太字・下線は、読みながら覚えるために強調したポイント。
※　実際の式辞は、言葉の使いかたに違いがあります。実際の映像は、ご希望される方のみ付録（特典映像）として、読者の方のみに限定配信いたします。ただし、ＳＮＳにあげるのはご遠慮ください。

その２週間後、３８年間勤めあげた教師人生の幕を（一時的に）閉じる日がやってきた。
以下は、自校の教職員に向けた手紙である。

Ｓ学園教職員の皆様
私は、本年度末で定年退職となります。教職に就いて３８年間、沢山の方々と出会いながら「教育」を「生業」として勤めあげたことを誇りに思います。
思い返せば、新規採用の際は「休暇等補助教員」でした。着任校の校長先生にご挨拶に伺った際、「松井先生は、取りあえず来てくれればOKです。」と言われました。学年・教科の担当がなく、校内の環境整備と部活動だけをしていました。それでも「大好きなサッカーができるからいいかな」と前向きに考えられたことが良かったのかもしれません。その後、社会科の先生・美術の先生が体調を崩され、代わりをしたことが今につながっています。
Ｓ学園の皆様には、大変お世話になりました。
私自身、つなぐ教育の最前線にいるＳ学園校長の任務には大きなやりがいを感じていました。今では、全国各地から視察に来るような「義務教育学校の成功事例」として前に向かって進んでいます。それも全ては各学級・学年、教科・領域、それぞれの役割を真摯に務めていただいている皆様の総合力のおかげです。「チームＳ学園」は、温かい人間関係を土台にした住みよい我が家です。その我が家を出る時がきました。
私は、ここで一区切りをし、新しい役割にチャレンジします。初心に帰って、声をかけていただき任せていただいた役割に真摯に向き合って参ります。これからもお世話になることがあるかもしれません。その節は、どうぞ宜しくお願いします。Ｓ学園の発展と皆様のご多幸を祈念いたします。ありがとうございました。

令和５年３月２４日　　松井　聰

私は、昨年４月から千葉大学教育学部附属教員養成開発センターで勤務している。主には、教職大学院の学生を指導する立場にあるが、学部（大学生）の授業にも顔を出している。教育学部のＷＥＢページ「新任教員紹介コーナー」に次のように記載した。

新任教員紹介
令和５年度より、教員養成開発センターに着任しました松井聰です。この３月、38年間務めあげた教師（教諭・教頭・副校長・校長）としての仕事を定年退職しました。これまで様々な感動をいただきつつも、同じくらいの失敗を重ねながら「人」として育ててもらいました。恩を受けた方々は数えきれないほどで、その方々に「恩返し」することは叶いませんが、今回、学生の皆さんへ「恩送り」をするチャンスをいただきました。教育は「人」です。皆さんがよりよい社会を築く「人」となり、児童生徒の心に灯を点けるような「人」になるためのお手伝いをします。実務家教員として、学校現場（小学校・中学校・義務教育学校・在外教育施設）や教育行政、企業派遣研修・研究組織での活動などの経験をもとに学生の皆さんと共に学びを深めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

恩送り

その「恩送り」にあたるようなことが、早速実現した。

教員養成開発センターの同僚に、教育学部１年生が履修する「教職概論」の自分自身が担当する時間（私の担当は４教室の中の１つだけだった）に「最後の式辞」を見せたいという希望を伝えた。すると、「それなら私の授業の時間を使ってください」と提案してくれた。そうであれば、一度動画をご覧くださいとデータをお渡ししたところ、自宅でご覧になって直ぐに連絡が来た。「素晴らしいです、先生。ぜひ、学生たちに見せましょう！」

着任早々、しかも大学生にとっての最初の授業で見せたいと思ったのは、「実務家教員」として採用された私にとって、「現場の生の声」を伝えることが一番大事だと思っていたからだ。結果的に、「この機会で伝えたい」と感じたことが実現することとなった。自分自身が最もこだわった「最後の式辞」は、まさに私の持つ経験（教材）の中の大谷翔平や三笘薫なのだ。（この表現は、かなりマニアックでした。圧倒的な存在と言いたかっただけです。）

動画は、約４００名いる教育学部の１年生ほぼ全員に見せることができた。定年を迎える校長の最後の式辞（生の声）ということで、学生たちは、静かに食い入るように見ていた。その時の感想をいくつか紹介する。

卒業式　校長式辞の映像を見て・・・授業「教職概論」受講生たちの感想（抜粋）

先生が、一人の人間として自分より少しだけあとに生まれた目の前のひとりの人間に話をしている。そんな感じがして感動しました。先生は、子どもより賢くて立派だなんてことはありません。自分と生徒が等しい存在だと理解しているからこそ抽象的でありきたりな言葉を選ばず自分の失敗談を自分の言葉で語れるのだと思いました。先生もおっしゃっていましたが、「素のままで」子どもに接することが大切なんだとわかりました。小中高校にいた時を思い出しても、今の自分を考えても、やはり相手が心を開いて弱い部分を見せてくれるとうれしいし、その相手を信じたいと感じます。だから、先生という役職名はいったん脇において一人の人間として子どもに接していきたいです。

私の知っている校長式辞は、紙に書かれたものを校長先生が読むというもので、あんなに人に語るような感じの話を見たのは初めてでした。だからこそ、自分が本当に言いたいことがより伝わるのだろうと思いました。聞く側になってみて、校長式辞であんなにも心が動かされたのは初めてでした。思わず涙が出てしまいました。自分の不安や悲しみの涙の経験を基にどのように困難に打ち勝っていくのかということを知ることができました。先生がどれだけ生徒を大切にし、情熱をかけて教育してきたのかということもとても感じられました。それと同時に、生徒がこれからどのように未来を生きていくのかということの後押しをしているかのように感じられ、当時の卒業生は本当に心強かったのだろうなと思いました。改めて、教員が生徒にとってどれだけ大きな存在かということを再認識することができました。本当に良い経験になりました。ありがとうございました。

松井校長先生の話を聞いて、感動して涙が出そうになりました。松井先生がおっしゃったように進学がうまくいかなかったり、大好きな人に振られたり、大切な家族を失くしたり、人生にはつらいことがたくさんある。それでも自分の道を選択することができるのは私自身であり、自分で良い人生にしていくことができる。本当にそのとおりで胸を打たれました。私は大学一年生となり、思った通りには共通テストの点も伸びなかったし、大好きな人に振られたこともあります。しかし、これからももっとこんなことよりももっとつらいことがあると思います。自分のこれからやこれまでの体験を子どもたちにさらけ出しつつ、子ども達から学び自分も成長していけたら、そして子どもの心に火をつけることができるような、そんな教師になれたらいいなと思いました。自分は今教師へのスタートラインを切っていて、この卒業式の動画をこの時期に見ることができてよかったと思います。松井先生の言葉通り「自分は素のままでいい」「子どもたちと共に成長できればいいんだ」という言葉を胸に卒業生たちと同じように、自分だけの花を咲かせられたらいいなと思います。

私の校長先生の話のイメージは、正直ただ話が長くて堅苦しいというものでしたが、松井先生の式辞は伝えようという熱意のもとで話し方や言葉選びなどが私の以前までのイメージとは全く違うものでした。また説得力を持たせられるような教師になるためには、自らが成長して生徒や保護者の信頼を常日頃から得ていることが必要だと思います。自分の言葉で届けることは簡単なことではないので、これからの学びを通して培っていきたいです。そして自分の経験が生徒にとっても学びになるということが教師の魅力だと思うので、私自身の指導力を高められるのはもちろん、子どもたちに伝えられるような経験値を高めることが教師には求められていると思います。

「物事は感謝からしか始まらない」という言葉を、先生ご本人が式典の最初から多くの方々に感謝を伝える姿勢を見せることで、感謝の大切さを考えさせることができるのだなぁと思った。先生の過去の体験談を話しながら、友達の大切さや伝えられるときに日頃から感謝の気持ちを伝えることの大事さを生徒たちに伝えているのを見て、自分の中でもすごく考えさせられる部分がたくさんあった。自分自身がきちんと周りの人を大切にし、感謝の気持ちを本当に持っていないと、聞く人の心には届くはずもないなと感じるようになった。卒業式の日はおめでたくて旅立ちを祝す日ではあるけれど、同時に生徒は、その先の自身の将来について不安を感じる日でもあると思うが、そのような日に、これから歩む人生においての選択肢を自由に決め、自信を持って進んでいくべきであると伝えられたら、すごく心強く感じるだろうなと思った。自分が教職員になったとき、その一瞬一瞬を大切にしながら伝えたいことをその場でできるだけ伝え、その姿勢を自ら示し、生徒たちが力強く未来を進んでいける手助けができるような人間でありたいと考えるようになった。

紹介したのは一部だが、ほとんどの感想がコメント用紙の半分以上を埋めていた。１０分足らずの短い時間に、集中して書いてくれていた。思いは伝わるのだと改めて強く感じた。

・・・・次号につづく。発信は、毎月１日を予定しています。（多少の前後あり）